

討論会場面の会話ストラテジー

小宮 修太郎

要 旨

議論の流れに円滑に、また効果的に参加していくためには、前置き表現などの会話ストラテジーの使用が欠かせないものである。本稿では、フォーマルな性格の討論会の録音資料をもとに、日本人話者が討論会場面でどのような会話ストラテジーを使っているかを調べるとともに、それらの働きについて考察してみた。

0. はじめに

討論という形式の授業は、コミュニケーション能力を高める会話教育の手段として有意義なものであると思われる。そこでは外国人学習者は、既存の日本語能力を駆使して、自分の意見をわかりやすく、論理的に展開することを要求される。また、他者の発言に応じて、それに適切につながる形で意見を述べていくという柔軟さも必要となる。このような教室活動の継続によって、簡単な日常会話のレベルをこえて、自分の思考内容を伝え合えるような会話能力が養われていくと思われる。しかし、その初期の段階では学習者にとって難しいと感じられる面もあるようだ。

筆者もある大学の留学生別科で、討論の授業を担当した経験がある。その時感じたことは、学生たちの発言には日本人話者が用いるような会話ストラテジーが欠けていること、そのために議論が円滑さを欠いたり、発言の趣旨がわかりにくくなったりしているということであった。

(注) ここで「会話ストラテジー」というのは、「コミュニケーションを行うために必要でありながら、コミュニケーションの内容に積極的に関与しない部分」(島 1987) という意味である。例えば、依頼の発話の場合であれば、「あの一、ちょっと、すみませんが」という部分が会話ストラテジーである。

そこで、まず日本人話者が討論の場面ではどのような会話ストラテジーを用いているのか、その実態を明らかにする必要があると考えた。また、会話ストラテジーを適切に使いこなせるようになるためには、それらが何のために使われ、どのような働き、効果を持っているかについての理解も必要であると思うので、本稿の後半では、その面からの考察も行った。

討論における会話ストラテジーの現れ方は、その討論会の性格(フォーマルか、インフォーマルか、など)、参加者の人間関係、司会者によるコントロールの強さなどによって、かなり異なったものになる。したがって、より全体的な眺望を得るためには多様な討論会資料の分析が必要となるのであるが、本稿では、その一段階として、フォーマルな性格の討論会における会話ストラテジーの現れ方を分析し、考察してみた。用例収集、分析のための資料としては、NHKテレビで日曜の朝に放映されている「政治討論会」「経済座談会」「国会討論会」(以下、これらをまとめてNHK

日曜討論会と呼ぶ) 及びテレビ朝日で放映される「朝まで生テレビ」シリーズの2種類、計13編の録音資料を用いた。(後記の資料一覧を参照)

1. NHK日曜討論会の分析

1. 0 資料の特徴

フォーマルな性格を持つ討論会における会話ストラテジー使用の実態を見るために、ここでは、NHKテレビ番組「日曜討論会」の録音資料11編を分析の対象にする。

この討論会のテーマは、政治・経済・外交などの分野の時事問題から選ばれ、討論参加者の職業は学者・評論家・政治家・財界人・外交官などが多い。

この討論会の特徴は、司会者の強い主導権と不断のコントロールのもとに、議論がほとんど常に秩序正しく進められていることである。議論の流れは、事前に詳しく計画されていることが窺われ、各人の発言は司会者の指名または、許可にしたがってなされることが原則になっているようだ。

コミュニケーションの構造に注目して議論の流れを見ると、この討論会は以下の分類でのA場面に始まり、B場面へと移行し、再び、A場面に戻って討論会がしめくくられるというパターンになっていることがわかる。

A. 司会者が各参加者に質問し、一問一答の形で進行する場面

B. 参加者同士が相互に意見を述べ合う形で進行する場面

会話ストラテジーの現れ方は、A、B両場面で大きく異なるし、B場面の中でも、対立が顕在化した局面と、そうでない局面とでは違いが見られる。したがって、この視点から、B場面をさらに次のように分類しておくことにする。

B-1. 意見が対立し合う局面

B-2. 対立がなく、協調し合う形で展開する局面

以下においては、とくにB1、B2の局面を中心に会話ストラテジーの現れ方を見て行くことにする。

1. 1 意見が対立し合う局面における会話ストラテジー

この局面で対立した意見の応酬がなされるとき、それが二人のやりとりで終わる場合と、他の参加者が途中から参加して行く場合がある。この、途中から参加して行く発話の機能は単に反対・賛成というよりは「介入」という言葉で表すことにしたい。会話ストラテジーの使い方から見て、反対意見と介入では異なる場合もあるからである。

対立局面で現れやすい発話機能は「反対意見」「賛成意見」「介入」の他、「主張」¹⁾「関連意見」などである。

表1. 1

資料8

発言者	機能	会話ストラテジー	発言の大意
1 C	質問	そこで、Kさんにちょっとうかがいたいんですが、	＜ソ連の動きについては、どうか。＞
2 K	返答	私、情報がないので、まったくわかりませんが、	＜ソ連、イラク間で水面下の動き。しかし、ソ連は内政困難でイラクに関心が薄い。＞
3 A	反対	今、K先生は内政とからめてソ連はイラクに関心が薄いというお話しでしたが、	＜ソ連にとっては内政と同じく大きな問題。イスラムは可燃性物質のようなものだから。イラクは相談できる相手だ。＞
4 W	介入	あの一、たしかに、イラクとソ連は今まで特別な関係にあって、	＜ソ連は、イラクとの過去の関係よりも、米との協調関係で動く。＞
5 C	質問	そこで、もう1つは	＜イランとの関係については、どうか＞
6 E	返答	9月中旬にイスラエル行ってきたんですが、	＜イラン、イラクには共通兵器があるので、軍事部品がイランから輸入される心配ある。＞
7 W	反対	あの一、たしかに、その問題はあります。しかし、	＜イランの供給能力は小さい。シリアから事実として抜けている。＞
8 A	介入	イランが補給ルートになるかについては、それから、たしかに、Wさんのおっしゃったのも、そのとおりだと思いますが、	＜イランから、かなり流れる。 シリア、イラクは骨肉の争い。＞
9 T	介入	ちょっと今の点ですね、私詳しくないんですが、	＜イランからの物資流入の問題はシンボリックには大きいですが、イラクが石油を売れないことが実質的には重要なのだ。＞

(注) 発言者の欄で、数字は発言の順番を表す。Cは司会者、その他はイニシャル。司会者の発話のうち、発言の許可をしているだけのものは省略した。

【反対意見】

反対意見にどのような会話ストラテジーが用いられるかは、討論会の性格によって異なっている。NHK討論会の場合には、何らかの前置き表現が用いられることが多いということが共通した傾向である。まれに「いや、」などの短い会話ストラテジーが用いられることもあるが、それは各政党の代表による討論会で議論が白熱した局面に現れているだけである。

反対意見につく前置き表現には、いくつかの定型があるが、NHK討論会では以下の4つが特によく現れている。

1つは、相手発話の趣旨を要約して示す前置き表現である。簡単に、引用の前置き表現と名付けておこう。最も多く現れ、慣用的表現とも言えるのは「今、Xさんは～とおっしゃいましたが、」というものである。

2つ目は、先行発話のある内容に注目し、それを議論の焦点に取り上げる前置き表現である。簡

単に論点化の前置き表現と呼んでおきたい。用例としては、「今の話ですがね、」と簡潔に論点化の意志を表明するものもあれば、「今のYさんのお話、重要だと思うんですがね、」というように先行発話の内容についての評価の言葉を含んでいるものもある。

3つ目は、端的に反論を予告する前置き表現である。「私、Zさんに一言申しあげたいんですが、」「今、おっしゃられたことで問題点あると思うんですが、」などの形をとる。これはNHK討論会のシリーズでは政党代表者による討論会の場合にだけよく見られ、その他の場合にはほとんど見られない。

4つ目は、丁寧化の前置き表現として分類されるものである。中でも、相手発話にある面で共感を示す前置き表現がよく現れる。「たしかに、おっしゃるとおりだと思うんですが、」「もちろん、そういうことはあると思うんですが、」などである。

丁寧化の前置き表現としては、この他に、相手の意見に理解を示す前置き表現や、自分の意見が間違っているかもしれない旨の前置き表現、対立関係をあいまい化するような前置き表現も観察される。

丁寧化の働きの仕組みや、その種類については、2. 2でまとめて論じることにした。

[介入]

介入の発話の前には、反対意見のための会話ストラテジーと共通のものもよく使われる。すなわち、共感示しや、予告、それに論点化の前置き表現である。

共感示しの前置き表現の場合は、形の上でも、反対意見につくものと変わりが無い。論点化や予告の場合は次のような形のものもあり、これらには単なる反対意見の場合との違いが感じられる。

「今の、Kさん、Oさんの話なんですが、」(論点化)

「今の点について、もう少しふみ込んで申し上げたいんですが、」(予告)

反対意見のための会話ストラテジーと異なるものとしては、次の2つの種類が観察される。

1つは、それまでの議論の流れについての自分の感想や心情を表現して前置きとするものである。

「今いろいろ興味あるご意見伺ったんですが、」

「今のOさんの話もそうだろうと思うし、Mさんの～という話もどうかと思って聞いていたんですが、」など。

2つ目は、自己発話のテーマを示す前置き表現である。例えば「金利の話ですがね、」「国際赤十字の動きですけども、」など。反対意見の場合とちがって、介入の場合にこの種の前置き表現がよく現れるのは次の理由による。すなわち、議論の展開過程で、出発点となったテーマの他に、それ自体テーマとなりうる事項が現れる場合がある。それによって、対立点が複数化、細分化されていき、後発の参加者がそれらのうちのある点について論じたいと思うときは、それを自己発話のテーマとして示す方が議論の流れとの関連がわかりやすくなるわけである。こうした理由で用いられるテーマ示しの前置きは、後述するように、大きく分ければ関係づけの前置き表現として分類すべきものである。

1. 2 協調しあう形で展開する局面の会話ストラテジー

参加者が相互に意見を述べ合うが、その論点については基本的に見解が一致しているという場合がある。その場合、各人は同じ問題のいろいろな側面を論じたり、関連する事柄に言及したりする。また、同じ問題についてではあるが、先行の議論には欠けていた視点からの発話がなされることもある。したがって、この局面で現れやすい発話機能は、賛成意見、関連意見、視点転換などである。

表1. 2

資料11

発言者	機能	会話ストラテジー	発言の大意
1 M	主張	私、6月にゴスプランの議長に招かれてソ連に行ったんですが、	◀ソ連の人達は市場経済というものがわかっていない。▶
2 S	賛成	いやー、まったく同様でしょね、	◀市場経済への移行には時間がかかる。過渡期のあり方がはっきりしていない。▶
3 H	賛成	私も深刻な危機だともいいましたが、	◀勤労意欲がなくなっている。方向づけの不明確さが問題。▶
4 U	関連	今、あの、共和国の話出たんですが、	◀連邦と共和国というたてまえは虚構で、改革派が共和国に保守派が連邦に拠っている▶

[賛成意見]

相互に意見を述べ合う局面では、賛成意見を述べる場合にも、何らかの形で先行発話へのリアクションを示したり、それとの関連を示す会話ストラテジーが使われていることが多い。分類してみると、以下ようになる。

1つは共感や賛意を表明するものである。これは一文の形をとる場合もあれば、前置き表現の形で表されることもある。これらと、反対意見を丁寧化する前置きを比べると、共感の表し方に相異があることがわかる。

例えば、全面的に共感を示すような前置き表現が用いられる。「いやー、まったく同様でしょね、」や、「もう、Sさんのおっしゃったことにつきますけど、」などである。

一文の形を取る場合も、「まー、まったくそのとおりだと思いますね。」「私もーだと思います。」など、全面的に共感していることが表明されることが多い。

これらと比較すると、反対意見の前置きは、共感を表明すると言っても、何かしら限定する感じが付け加えられる場合が多い。「まー、あの、まさにそうなんでしょうけども、」「うん、まー、あのそう言えないことはないと思いますけども、」などはその典型である。

2つ目には、賛成意見を述べることを予告するものである。これも前置き表現、または一文の形で表されることが多い。例えば、「先ほどIさん、おっしゃった意見に私も賛成なんですけど、」「あのね、その点についてはOさんといっしょ。」などの用例がある。

3つ目に、先行発話の要旨を引用するものがある。慣用的な表現としては、「今、xさんがおっ

しゃったように、～と思います。」などがある。「～ように」の代わりに「～とおり」もよく使われる。

4つ目に、論点化の前置き表現の後に賛成意見が続く場合もある。「今の点、重要だと思いますが、」のように、相手の発言を評価しつつ論点化していく用例が見られる。この場合は反対意見につくものと形が同じなので、前置き表現だけからは、その後に賛成意見が来るのか、反対意見が続くのか、はっきりしないと見える。

【関連意見】

同じ話題、論点について、先行の発言に引き続いて関連する事柄、意見を述べるという内容の発言である。先行発言を補うという性格のものであれば「補足意見」、先行発言とは区別される、独立性の強い性格のものであれば「展開意見」と分類することもできる。しかし、ここでは両者をまとめて「関連意見」として扱い、見ていくことにする。

表1. 3

資料5

発言者	機能	会話ストラテジー	発言の大意
1 C	質問	<u>さて、そこで、</u>	◀日本のなすべきことは何か。中東は何を期待しているか。▶
2 N	返答	<u>まー、サウジにまいりまして、</u>	◀1つは経済面の支援。しかし金だけではなく、人を送ることが重要だ。▶
3 M	関連	<u>まー、大臣の、だいたいその通りではないかと思えますけれども、</u>	◀中東は日本に技術協力、工業化の面での協力も求めている。緊急時の協力について意見聞きを。▶
4 T	反対	<u>まー、一般論としては大臣のおっしゃるとおりだと思いますが、私としては、</u>	◀イラン・イラクのバランスが重要であり、今求められているのはイランの強化だ▶
5 N	関連	<u>あのー、</u>	◀シリアはイラクに対抗。イランは講和したが支援の気持ちは持っていない。戦後復興に協力すべきだ。▶
6 K	関連	<u>私は、今Tさんおっしゃられたこととの関連で感じますことは・・・</u>	◀1つは警察機構。2つ目に軍事的禁欲。3つ目に、地域的安全保障の体制。踏み込みが必要だ。▶

関連意見の場合は、賛成意見の会話ストラテジーに類似したものもよく使われる。共感を示す前置きや、引用の前置きなどである。

「まー、まったくその通りだと思いますが、」（共感）

「あの、私は、Kさんおっしゃったように、米国民が一致団結していることは事実であって、」（引用）

一方では、介入の場合と共通した会話ストラテジーもよく用いられている。つまり、論点化の前置き、テーマ示しの前置きなどである。これらは、いずれも「関係付け」の働きを持ち、「介入」の項でふれたような理由で用いられているものと考えられる。

「国際赤十字の動きですけれども、」（テーマ示し）

「ま、今の、そのお話ですけれども、」（論点化）

この他に、関連発話を予告する前置きも用いられる。

「あの一、今との関連で言うと、」

「私は今Tさんおっしゃられたこととの関連で感じますことは、」などの用例が見られる。

[視点転換]

ある論点について議論が続いているとき、それまで出ている意見とは異なる角度、視点から意見を述べようとする場合がある。そういう場合、発言者は直前までの議論の流れとの関係を明らかにするために、何らかの前置きをつけることが多い。

表1. 4

資料8

発言者	機能	会話ストラテジー	発言の大意
1 K	返答	<u>基本的な米のスタンスは8月のスピーチで明らかだと思っんですが、</u>	◀ブッシュは強硬。しかし軍事介入が選挙前に行われる可能性は低い。▶
(中略。この後、3人がそれぞれ米国の動きについて予測を述べている。 軍事介入がどのような条件の下で可能か、時期はいつ頃か、などの意見が続く。)			
5 W	視点転換	<u>あの一、今皆さんのおっしゃったのはそれぞれ事実だと思っんですが、</u>	◀米は今回、どのような国際協力体制ができるかを模索している。米だけでは解決できず、同盟諸国の動きが重要。▶

視点転換の発話の前置き表現には、大きく分けて、2つのタイプがあると言える。1つは視点を変えて論じることを予告するものであり、もう1つはそれまでの議論の流れや意見に何らかのリアクションを示すものである。

視点転換を予告する前置き表現としては、「ちょっと、角度を変えるんですが、」などの用例が見られる。それまでの議論の流れと異なるものになることを予めことわっている前置きである。しかし、後に見る、ディスコース変換を求める前置きの場合とは違って、失礼をわびるという感じのものは見られない。当面の論点から離れるような発言ではなく、その議論に新たな視点を持ち込むという積極的な意味を持つものだからであろう。

また、表1. 4の5Wの用例にあるような、先行する議論の流れへのリアクションを示す前置き表現もよく使われる。それまでの議論に対して何らかの感想や、評価や、自分の心情を示すものが

多い。それらの中には、丁寧化の働きも持っていると感じられるものもある。例えば、《共感するが、しかし・・・》というような展開になっている場合である。

一方、リアクションの中には、否定的なものや、直前の議論には中立的で、その問題はペンディングしておきたいという態度を示すものもある。

「今までの議論にね、不足してるんじゃないかなーと、私、感じますのはね、・・・」

「アメリカが～かどうかは、ともかくとして、・・・」など。

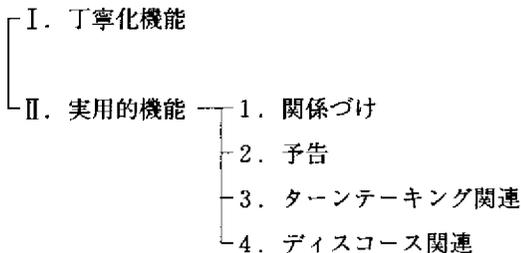
以上のように、ここまでは発話の機能別にどのような会話ストラテジー、が現れやすいかを見てきた。これらを横断的に見ていくと、各種の意見発表の発話には丁寧化、予告、引用、論点化などの前置き表現がよく用いられていることがわかる。以下においては、討論会で使われやすい前置き表現について、具体的にどのような働きをしているのかを考察してみたい。

2. 前置き表現の働き

フォーマルな性格を持つ討論会の中では、会話ストラテジーとして前置き表現がよく用いられ、多様な役割を果たしている。ここでは、それらの前置き表現の働きを分類整理し、その中で特に「丁寧化」と「関係づけ」の機能について考察してみたい。

2. 1 会話ストラテジーとしての前置き表現の分類

討論会の中で会話ストラテジーとして使われやすい前置き表現は以下のように分類できると考える。



丁寧化機能というのは、「人間関係を円滑なものとして維持しつつ、コミュニケーションを行う²⁾」という目的に役立つ働きである。具体的には2. 2で説明する。

実用的機能というのは、「正確に、効率的に、より効果的にコミュニケーションを行う」という目的に役立つ働きである。討論会という場面に即してより具体的に言えば、「議論の流れに円滑に参加し、より有効に働きかける」という目的に役立つ働きであると言える。

下位分類の中で「関係づけ」というのは引用、論点化、テーマ示しなどの前置き表現に共通する働きを表すものである。その働きは、「会話の流れに自己発話を関係づけ、流れの中の位置を明らかにする³⁾」ことだと考える。より詳しくは2. 3で論じることにする。

「予告」というのは、自己発話について予告や注釈を行う前置き表現を表すものである。すなわち、自己発話の内容や機能など何らかの側面について、聞き手の予測や手掛かりになるようなことを言い添えるものである。何らかの意味で発話を聞きやすくすることに関連する働きを持っている。

「ターンテキング関連」というのは、発話機会の獲得や、維持のために使われる前置き表現を表すものである。司会者のコントロールが弱いときや、議論が激化した局面では、参加者は発話の機会を獲得するために、あるいは発話機会をめぐるトラブルを緩和するために何らかの会話ストラテジーを使うことが必要になる。そういう時に使われる前置き表現である。

「ディスコース関連」というのは、議論の流れを変えさせたり、整理したりするために使われる前置き表現である。議論の流れの方向づけをめぐる対立が生じた時などに使われる。具体的用例は3章で紹介する。

2. 2 丁寧化の働き

反対意見を述べる前に、共感を示す前置きをつけたり、自分の間違いの可能性を認める前置きをつけたりするのは、どうしてだろうか。これらの前置き表現の用法は、コミュニケーション一般に広範に現れるポライトネス（丁寧さ）の現象の一部として理解することができると思う。

私たちがコミュニケーションを円滑に、効果的に行うためには、内容面の伝達性の確保とともに、聞き手に気持ちよく受け取ってもらえるようにするという意味での対人関係上の配慮が必要である。このような、対人関係を維持しつつ効果的なコミュニケーションを行うためのさまざまな手段・工夫を意味するものとして、ポライトネス（丁寧さ）という概念が用いられている。

丁寧さのストラテジーは、コミュニケーション一般に現れる可能性を持つものであるが、聞き手にとって現実的負担とか、心理的不快感とか、何らかの意味で聞き手に損になるコミュニケーションを行う場合には特に必要となるものである。

P. Brown と S. C. Levinson は、ポライトネスという言語現象を個別の言語や文化を超えた普遍性を持つものとして捉え、詳細な比較研究により、その共通の仕組みを明らかにしようと試みた。こうした彼らの理論は日本語における丁寧化の前置き表現の働きを理解するのに有効であると思われる。

彼らの著作“Politeness-Some universals in language usage”（1978,1987）は、言語行動の主体を、対人関係上2つの根源的欲求を持つ存在として捉えることから出発する。その欲求とは、1つは、自分の領域を侵害されず、行動の自由を妨げられないことへの欲求（Negative Face 欲求）であり、もう1つは自分が他人から好まれ、評価され、是認されたいと思う欲求（Positive Face 欲求）である。

そして、この2つの欲求に照らして負の意味を持つ行動（Face Threatening Action）を行うときには、それによる対人関係上のリスクを回避したり緩和したりして、それを最小限にするための手段がポライトネスだと言うのである。

その手段は、言語行動と非言語行動にわたって、さまざまあるものの、大きく分ければ、4つの丁寧さのストラテジーに分類されると言う。

1つはリスクが極めて大きい場合で、その行動の実行を断念することである。2つ目はリスクの責任を回避するために間接的な表現による伝達を試みることである。3つ目は、相手の Negative Face 欲求を満たす補償行為によって、リスクを回避したり、緩和したりすることである。これは消極的丁寧さ (Negative Politeness) と呼ばれる。例えば、依頼の発話をするときに相手が断わりやすくなるような配慮を示す前置きをつけることは、このストラテジーの一手段であると言える。4つ目は、相手の Positive Face 欲求を満たす補償行為によって、リスクを回避したり、緩和したりすることである。これは積極的丁寧さ (Positive Politeness) と呼ばれる。具体的に言えば、相手に親密な行動をとることによって、心理的な面から、そのコミュニケーションを受け入れやすくすることである。

“Politeness” は丁寧さのストラテジーを以上のように分類した上で、それぞれに属する具体的なストラテジーの種類を列挙し、実例をあげて説明している。例えば、積極的丁寧さのストラテジーに属するものとしては、『集団的アイデンティティの目印を使う。』『意見の一致を求める。』『意見の不一致を避ける。』など15のストラテジーが挙げられている。

討論会で用いられる丁寧化の前置き表現をこうした視点にもとづいて分類整理してみると、以下のようになる。ただし、具体的ストラテジーの分類項目では、“Politeness” の中で挙げられたものの他に、独自に命名して設けた項目もある。(用例は、NHK「日曜討論会」11編と、「朝まで生テレビ」2編から収集。)

(1) 積極的丁寧さのストラテジーに属するもの

①『相手に共感を示す』

「もちろん、まー、そういう点はあると思いますけども」(反対)「もう、Sさんのおっしゃったことにつきますけども」(賛成)「まー、まったくその通りだと思いますが」(関連)「今、皆さんのおっしゃったのは、それぞれ事実だと思うんですが」(視点転換)

②『相手に理解を示す』

「Iさんのおっしゃることはわかるんだけど」(視点転換)

③『意見の対立を緩和して示す』

「Nさんの具体問題と基本問題というの、結局ニワトリとタマゴの関係かもしれませんがね」(反対)

④『評価や賞賛の態度を示す』

「今の、おっしゃった点、私は大事だと思うんですがね」(反対)「今いろいろ、興味あるご意見伺ったんですが」(介入)

⑤『感謝の気持ちを表す』

「それで一言言わせていただくと、ありがたいんだけど」(ターンテーキング関連)

(2) 消極的丁寧さのストラテジーに属するもの

①「自分が誤っている可能性を認める」

「これこそ、私個人の意見で自信ないんですけども」(反対)「かなり、独断と偏見もって申し上げるんですけども」(主張)「これは感じだけですから、わかりませんけども」(反対)

②「尊敬を示す」

「これはK先生もおっしゃることですけども」(主張)「釈迦に説法ですけども」(主張)

③「謝る」

「たいへん悪いんだけど」(ディスコース転換)

④「謙遜を示す」

「ちょっと、今の点ですね、私詳しくないんですが」(介入)「先が言えるほど、ものは見えないんですが」(返答)

2. 3 関係づけ

討論会で使われる前置き表現の中には、議論の流れの中のある部分と自己発話の関連を示す内容のものが見られる。その部分というのは、直前の先行発話であったり、より以前の先行発話とか、その中の1つの事項であったりする。こうした内容の前置き表現は、直接にはその部分と自己発話の関連を示しながら、同時に「議論の流れに自己発話を関係づけ、流れの中での自己発話の位置を明らかにする」という共通の働きを持っていると思われる。

ここでは、関係づけの前置き表現に属するものとして、「引用」「論点化」「テーマ示し」の3種類を取り上げ、その働きを具体的に考察してみたい。

〔1〕引用の前置き表現について。

1章で見たように、反対意見、賛成意見、介入、関連意見など、さまざまな場合に引用の前置き表現が使われている。引用の対象は直前の先行発話であることもあれば、ずっと以前に出てきた発話であることもある。

表2. 1

資料2

発言者	機能	会話ストラテジー	発言の大意
1 N	返答	はい、この一、	◀①南北関係の流れが変わり始めた。②とくに軍事問題の討議に変化。③背景要因の中では、今年の韓国内における統一運動の高まりに注目。▶
2 H	賛成	これは、やはり、あの一、今Nさんがおっしゃったように、	◀④韓国内で、統一を妨げているのは自国のほうだという批判が高まり、⑤盧も選挙時から、新しい公約を出し、オリンピック後さらにふみ出した。▶

＜中略＞			
8 N	返答	はい、あの、先ほどおっしゃられたような側面は確かにあると思うんです。	＜オリンピック＝政治休戦後の政局は困難。統一問題や、不正追及、労働問題。北方政策は政権の基礎固めの手段だ。＞
9 I	反対	もちろん、まー、そういう点はあると思いますけど、先ほど、Hさんご指摘になられましたけど、	＜根本的には盧は北への姿勢が相当に変化した政権。大統領選挙中からそうしたプランを持っているわけで、スケジュールどおり。＞

この議論の流れの中では、2 Hと9 Iの発話に引用の前置き表現が使われている。8 Nの発話の冒頭部分も同様の働きをしているものと言える。いずれの発話も、先行する他者の発話の内容に関係づけながら、自分の意見を展開していると言える。

2 Hは1 Nの発話の結論部分、つまり③の内容を引用し、それを出発点として、さらに新たな内容を付け加えて賛成意見を述べている。2 Hの前置きでは、内容面の関係づけと同時に、1 Nの意見に賛成の立場で意見を述べるという位置づけもしめされていると言えよう。

9 Iは意見の内容を見ると、前記のNやHに反対の立場にある。Iが主張したいのは「盧政権は基本的に北に柔軟な政権であり、オリンピック後の難局を乗り切るための戦術としてやっているのではない。」ということである。そのために、ここではIは、ずっと前に出てきた2 Hの発話の一部つまり⑤を引用して、1つの根拠として利用しながら、自分の意見を展開している。

引用の前置きは、他者の発話との関連を示すと同時に、自己の発話をより効率的に、あるいは効果的に展開するためにも役立っている。「効率的に」というのは、自己発話をできるだけ簡潔に、短い時間で述べるのに役立っているということである。引用の部分では、相手発話の話の要点を示すだけでよく、その説明になる部分は既に述べられたこととして聞き手に想起してもらえば済むからである。

また「効果的に」というのは、引用によって自分の意見をより説得力のあるものにできる場合があるということである。引用した内容が、信憑性のある情報や説得力のある意見であれば、自分の意見を構成する材料や根拠として有効に利用できるからである。

引用の前置きは、以上のような意味で「実用的な」役割を果たしていると言える。

[2] 発話のテーマ示しの前置きについて。

関連意見や、介入の意見を述べる時に「金利の話ですけれどね、」とか「赤十字の動きですけれども、」のように、自己発話のテーマを示すことがある。これは、どのような展開の時に、何のために使われているのだろうか。

討論会の一局面で同じ主題で議論が続く中で、その主題に密接に関連する、より小さい論点が生じ、論点が複数化されていくことがある。そうした副次的な論点についても議論が始まるならば、議論の主な流れの中に、より小さな支流が発生し、枝別れしていくという展開にもなりうる。

このような場合には、ある副次的な論点について意見を述べたいと思う者は、自己発話のテーマを前置き表現で明示することによって、議論の流れと自己発話の関連を明らかにすることが必要になる。「主な流れ」「支流」という比喩で言えば、枝別れしていく流れへの方向指示を行っているとも言えるわけである。実際、議論の流れが複雑なものになればなるほど、こういう意味でのテーマ示しの前置きが現れやすくなるのが観察される。

発話のテーマ示しの前置きは、このように、議論の流れとの関連を示して、自己発話の位置を明らかにするために役立っていると言えよう。

[3] 論点化の前置きについて。

論点化、つまり「今の話、重要だと思うんですけどね」というような前置きでは、1つの先行発話との関係だけが問題であるように見える。しかし、これも議論の流れとの関連で見る必要があると思われる。

例えば、実際の討論会の一場面で、次のような議論の展開が見られる。(発言は要約して示す。) 司会者：◁中東危機に関して、日本はどのような貢献を求められていると思うか>

A：◁モノ、カネの援助の他に、人を送ることも必要だ。>

B：◁中東諸国は日本の技術協力、工業化への援助を期待している。それが基本だ。>

C：◁日本のできることは限られている。今すべきことはイランへの援助でバランスをとること。>

D：◁国連中心に安全保障のシステム作りをすべきだ。>

E：◁まず資金負担。しかし、その前にイラクを軍事大国化した欧米諸国の責任をはっきりさせてから、日本の貢献策を論ずべきだ。>

F：「今の、おっしゃってた点、私は大事だと思うんですがね、」◁たしかに、他の諸国がイラクの膨張に手を貸した。しかし、多くの国々を巻き込んで国際的な安全保障の体制を作るべき。過去より、現在を焦点に。>

E：◁間違いは間違いと認めさせた上で、安全保障の体制を作るべきだ。>

この場面では、FがEの発話の内容を論点化することによって「イラクの軍事大国化の責任を問うべきか、否か」をめぐる議論の流れが発生したと言える。それは、「日本の対応について」を主題とする議論の流れに対しては副次的なものであり、1つの支流であると言える。[2]で見たテーマ示しの前置きと同様に、論点化の前置きもこうした全体の流れとの関係、支流への方向付けを表示するものとして捉えることができるのではないだろうか。

もう一度要約して言うと、論点化の前置きは先行発話との関係を表す(その先行発話は直前のものであることも、より以前のものであることもある。)と同時に、議論の流れと自己発話との関係も表す働きを持っていると捉えることができる、ということである。

3. 「朝まで生テレビ」の場合

3. 0 資料の特徴

ここでは、テレビ朝日の討論会番組「朝まで生テレビ」2編を資料として、会話ストラテジーの現れ方を観察する。

この番組もフォーマルな性格のものではあるが、討論の進め方、場の雰囲気などの面でNHK討論会とは異なる特色を持っている。

この討論会は、毎回深夜1時から朝6時までという長時間をかけて行われる。参加者は「〇〇反対派」対「〇〇賛成派」というように、おおむね2つの陣営に分かれることが多く、議論はディベートのような感じで行われていることが多い。

場の雰囲気もNHK討論会とは対照的である。NHK討論会は、生真面目で固い感じであるのに対して、こちらは率直に意見を述べ合う自由な雰囲気が感じられる。

司会者のコントロールの程度は、NHKの場合ほど強くない。議事進行の主導権・決定権は司会者にあるものの、その方向づけをめぐる参加者間で激しい対立が生じることもあり、それによって議論の流れが揺れ動く局面もしばしば見られる。また、議論が激化してくると、司会者の指名や許可とは関係なく、参加者同士が自由に意見を述べ合い、同じメンバー間の応酬が続くという展開にもなりやすい。

3. 1 「朝まで生テレビ」討論会における、会話ストラテジー使用に見られる傾向

NHK討論会の場合と比較しながら、この討論会の資料を見ていくと、ここでの会話ストラテジーの現れ方には、次のような傾向があることがわかる。

- 1) 感動詞、接続詞などの短い会話ストラテジーの使用頻度が高い。
- 2) 前置き表現の使用頻度は相対的に低い。
- 3) 前置き表現の中で、丁寧化の前置きはあまり使われない。
- 4) 前置き表現の中では、ターン・テークン関連、ディスコース関連の前置きの使用が相対的に多い。

全体的にはこうした傾向が見られるのであるが、特に、討論会の中の場面が次のa、bのいずれであるかによって、会話ストラテジーの現れ方に際立った変化が見られる。

a. 各参加者が、ある程度長くて、まとまりのある意見を述べていく場面。

b. 議論が激化して、参加者同士が直接に短い発話で応酬し合う場面。

bの場面では、1)の傾向が特に強く、aの場面では、前置き表現が使われることもあり、会話ストラテジー抜きで内容部分に入っていくこともあるが、1)のような短い会話ストラテジーの使用は少ない。この他に、特別な場面として、以下のものがある。

c. ディスコースをめぐる対立し合う場面。

この場面では、ディスコース関連の前置き表現もよく使われるし、1)の短い会話ストラテジーも使われる。

次に、具体的に、発話機能の種類ごとにどのような会話ストラテジーが使われているかを見ていこう。ここでは重複を避けて、とくにNHK討論会の場合と異なるものを中心に見ていくことにする。

3. 2 発話機能の種類別に見た会話ストラテジーの現れ方

〔反対意見〕

(1) b場面では1つ1つの発言が短くなる。使われる会話ストラテジーも、短いものがほとんどで、反対意見の場合には、「いや」「いやいや」「でも」「ただ」などが良く使われる。

表3. 1

資料12

発言者	機能	会話ストラテジー	発言内容
1 W	主張		「そうすると、いかにね、僕は直接税中心の日本の・・・」
2 T	反対		「直接税中心だからじゃないんですよ。直接税の中身が今まで悪かったからなんです。」
3 W	反対	<u>いや、</u>	「いや、私の言うのは日本の税収入の中で直接税の占める割合というのは欧米の諸国から比べたら圧倒的に・・・」
4 T	反対	<u>いえいえ、</u>	「いえいえ、アメリカと変わらないですよ。」
5 W	反対	<u>いや、</u>	「いや、アメリカより高いですよ。わずか、5%の差にしてもね。西ドイツと比べたら、10何%高いですよ。」
6 T	反対		「ヨーロッパとはね。アメリカとはそんなに変わらない。」
7 W	反対	<u>いや、だから、</u>	「いや、だから、日本の税制はアメリカと比べてもね、直接税の収入が高いですよ。」

このような局面では、議論の流れは限定されたある一点をめぐる応酬へと収斂していくことになりやすい。その一点というのは、ある判断・意見を支える根拠になる事柄であるとか、意見のちがいの根底にある基本的な視点であるとか、意見の中に現れたある表現・言葉とか、いろいろな場合があるが、その点についての押し問答が続くわけである。

こうした場面に現れる会話ストラテジーのいくつかについて、意味やニュアンス、使われ方を見てみよう。

①<いや>

反対意見の前では、これが最も多く使われている。その働きは2つあり、1つは相手の発言をさげすむ意図を表すもの、もう1つは相手の発言内容を否定する意図を表すものである。表3. 1で

言うと、3Wの「いや、私の言うのは…」は、相手発話をさえぎる「いや」であり、5Wの「いや」、4Tの「いえいえ」は相手発話を否定するものである。「いやいや」「いえいえ」は、「いや」のヴァリエーションで、否定の気持ちをより強く表していると言えよう。

②<でも>と<ただ>

相手発話を否定する「いや」には、全面否定という強い感じがあるのに対して、「でも」は、相手発話の内容を一応認めつつ反対するという態度を表しており、やや柔らかい感じを与えるものである。

「ただ」についても同様のことが言えるが、こちらの方が、相手発話を認めたり、理解を示す態度がより鮮明に感じられる。<あなたの主張もわかるが、別の理由から反対せざるをえない>というような気持ちを、「ただ」という短い会話ストラテジーに圧縮して表現していると思われる。

表 3. 2

資料13

1 T	反対	<u>ただ</u> 、	「ただ、ぼくは一言だけ言いますと、たとえばアジア人の労働者がたくさん入ってきて、それをどんどん権利を認めてやればね、だいぶ違う。」
2 I	反対	<u>でも</u> 、	「でも、今一億何千万の日本人の話をしているのでして。」
3 T	反対	<u>いや、いや</u> 、	「いやいや、現行のね、今の制度が全部そのままだという前提で話をするからおかしくなるんでね。」
4 I	反対	<u>ただ</u> 、	「ただ、人口の話はねー、あの一億何千万の日本の人口だけを見ても、これはかなり急速に高齢化が進むのは、日本人だったら誰でもわかっていることだと思うんです。」

③<だから>

「だから」は、反対意見の他に、同じ立場での関連意見にも使われる。反対意見につく会話ストラテジーとしての働きは、次のように考えられる。まず1つは、「だから」は相手の発言の内容を逆に利用して、それを理由にするような形で、内容的には反対の自分の主張につなげていく場合に用いられる。それから、もう1つは、「先行する話の内容に関係なく、むしろ相手の話を強引にひきとって話の主導権を握るため用いられる」(水谷1980)と述べられているような使い方もある。この場合は、理由-帰結の関係は、先行発話との間にではなく、自分が先に言ったこととの間にあるようだ。

(2) a 場面で、反対意見を述べるときには、「いや」「でも」などが使われることは少なく、ほとんど見られない。その代わりに何らかの前置き表現が使われる場合と、会話ストラテジー抜きで、ずばり反論に入る場合が見られる。

前置き表現の中では、NHK 討論会で見たと同じ種類のもものがそれぞれ使われている。ただ、頻度から言うと、丁寧化の前置きは著しく少なく、引用の前置きは割合よく使われるという傾向が見られる。

その他に、反対のための質問、言い換えれば質問の形式をとった反論という性格をもつ発言もよく見られる。その場合、この質問の前には、次のような前置きがつけられる。

「だから、あのー、Sさんにお伺いしたいんですけど」

「じゃ、Kさん、お聞きしますけど」

「お聞きしたいんですけど、全然財源にならないと言われてたけど、……」

〔賛成意見〕

(1) b場面では、賛成意見の会話ストラテジーとして「そうそう」「そりゃ、そうですね」などの賛意を示すあいづちがよく使われる。「いやー、まさに、そのとおりなんです。」のように全面的な共感を示す一文がつけられる場合もある。

その他、直前の相手発話と全く同じ言葉、あるいは、ほとんど同じ言葉をおうむ返しに繰り返して賛意を表明している用例も見られる。例えば次のようなものである。

T 「分配の時代に入ってきたと」

M 「それは違う」

S 「それは違う」

(2) aの場面では、賛成意見の会話ストラテジーとしては、NHK討論会で見たのと同様な前置き表現が使われる。

すなわち1つは、共感を示す前置き表現で、「やっぱりね、私もそう思うんですけどね」などの用例が見られる。

もう1つは、相手発話の要旨や表現の一部を引用して共感を示す前置き表現である。「Oさんが言うとおりの、日本人はケチに見えるんですよ。」という形の文になる。

それから、賛成意見を予告する前置き表現も使われる。「ほくも部分的にはMさんの意見に賛成で」などである。

〔関連意見〕

(1) b場面で、関連意見を述べる会話ストラテジーとしては、「だから」「しかも」「それと」「それから」などの接続詞がよく使われる。

①<だから>

先行の発話に賛成しつつ、その内容を理由として自分が言いたいことを付け加える場合に用いられる。例えば、次のように使われている。

T w 「そうなると、そもそも高齢化社会に対応するために税制改革をするという前提がまちがっている」

O 「まちがっている」

T k 「だから、ソ連の脅威と同じだと言うんです。嘘ですよ」

②<しかも>

先行の発話に賛成しつつ、それを豊富化したり、補強したりするための意見を述べる時に使われる。例えば、次のように使われている。

T 「いや、僕は整理じゃないと思う。Oさんの意見に近いんだけど、(中略)これは開いたら、今15万人というけど、アッという間に100万人になりますよ。それを100万人、200万人にしているのか、あるいはしたくないのか、というそのところをきちんとしなけりゃいけない。」

Y 「しかも、その数字の上で同じ100万人にしても、定住化する100万人なのか。あるいは出稼ぎという形で2、3年働いたら帰るという100万人なのか。」

(2) a場面では、関連意見に使われる会話ストラテジーとしては、NHK討論会で見たような種類の前置きがそれぞれ用いられている。

頻度から言えば、相手発話の要旨を引用して共感を示す前置きがよく使われる。また賛意を表明するもの、関連発言を予告するものもよく使われている。

A 「私も、この前の誌上討論会で、免税品目を増やしたら、帳簿方式をとった以上、ガタガタになるだろう、(後略)」

K 「もう少し具体的に言うと、見直しの一つの案は、前の売上税ですよ。(後略)」

[ディスコース転換]

この討論会では、議事進行をめぐる参加者同士が対立する場面がときどき見られる。そうした場面では、どのような会話ストラテジーが用いられているのだろうか。

そうした場面の発端になる発話、つまりディスコース転換を求める発話には何らかの前置き表現がつけられることが多い。

1つは、議論の流れをさえぎって、転換を求めることをわびる表現である。失礼をわびるという意味で、丁寧化の前置き表現であると言える。

M 「たいへん悪いんだけど、せっかく僕はHさんとKさんとかで、選択するというMiさんから始まった議論だから、本当はその土俵で議論したら2つの哲学がバーッと出て来るわけ。それでOさんがグーッと持っていっちゃってね、ボンボコボンボコ話が飛ぶから、一個一個ついて行ってもいいんだけど、できたらね・・・。

T 「戻そうか。」

M 「悪いけど、戻してほしいんです。」

もう1つは、先行発話に対するリアクションを示す前置き表現である。たとえば相手に部分的に共感を示した上で、次に議論の流れについて言及し、それをふまえてディスコース転換を提起するというような展開になる。これも、共感を示す部分は、丁寧化の働きを持った前置き表現であると言える。

M 「後者の税の利益化はいいんだけども、逆進性の問題からもし入っていいならば、僕はそういう議論をしてもいいんだけど、(中略)そういうことを話をしたって問題にならないんで、消費税を入れる前の税制にどういう欠陥があって、そこからどう直さないといけないかということを言わないと、・・・

T 「それをやり出すと、・・・。」

M 「それをやらないとだめですよ。」

その他、相手発話の問題提起をさえぎってディスコース転換を提起している例もあり、そこでは次のような会話ストラテジーが使われている。否定的なりアクションという意味では、視点転換の場合の「ーは、ともかくとして」との共通性が感じられる。

T 「こっちは直接税をもうちょっと多くしようと、これだけの違いですか。共産党を除く野党側の提案と、自民党の違いをちょっと解説してください。」

M 「違いもさることながら、この議論の進め方は、代替財源案と再改革基本法、これは違うわけですね。」

T 「ごっちゃにしてないよ。」

M 「それが議論の中でいっしょになってみたり、分けてみた時があったり、・・・」

〔ターンテークング関連〕

「朝まで生テレビ」討論会のような激しい議論の中では、いかにして自分の側にターン（発話機会）を持ってくるか、いかにしてターンを維持するかについての努力や工夫が必要となる局面も出てくる。そのためには、何らかの会話ストラテジーの行使が必要になると言える。

①ターンの獲得のためのもの

まず、短い発話にとどめることをことわりつつ、発話の許可を求める用例がある。

「Tさん、一言だけ。」「30秒だけ。」「ただ、先生、1つだけ言わせてください。」など。

次に、前置き表現の形で短い発言にとどめることを予告するものもある。また、それを丁寧化して、発話が許可されるならうれしい、という気持ちを表す前置きもある。

「ただ、僕は一言だけ言いますけど、」(予告)

「うんと手短にやりますけど、」(予告)

「それで一言言わせていただくとありがたいんですけど」(丁寧化)

②ターン維持のためのもの

自分が発言している途中で、一区切りのところに来たが、もう1つ先を話したいという場合は、途中でターンを維持するための会話ストラテジーを使うことが必要になる。例えば次のような前置き表現が使われる。

「それからついでですから、発言の番がなかなか回って来ないから、Oさんに聞いておきたいんですが、・・・」

③ターン回復のためのもの

これは、自分がまだ全部言い終わらないうちに、他の人の発言が入ってしまったときに、それを抑えて再び話を続けたいという場合である。

1つは、相手発話をさえぎるための一言でターンを回復していく例が見られる。例えば、

「ちょっと待ってください。」

「いや、だから一言だけ言いたい。」などである。

もう1つは、次のように、ターン継続の意志を表す前置きや、その他の表現が使われる。

「もう一言だけしゃべらせてもらいたいと思うんですけども、・・・」

「もうちょっと言いたいのは、・・・」

以上のように、ターンテイク関連の会話ストラテジーとしては何らかの前置き表現や、一文の形のもが使われることが多いと言える。

4. まとめ

この調査研究で1つは、討論会場面でどのような会話ストラテジーが使われているかを見てきた。その中で、長さや形の上で対照的な2つのグループがあり、討論会の性格や局面によって使い分けられていることがわかった。しかし、頻度の差はあっても、1章でリストアップした各種の前置き表現は、3章で見たような性格の異なる討論会でも共通に用いられていることも観察された。このことは、これらの前置き表現がフォーマルな討論会の会話ストラテジーとして一般性をもつものであることを示唆していると言えよう。

3章で見たように、率直な雰囲気の討論会の中では、短い会話ストラテジーの使用が多くなる。また、丁寧化の前置き表現の使用が少なくなることも観察された。

丁寧化の前置き表現は、NHK討論会の中でも各政党代表者による政治討論会ではあまり見られず、学者・評論家を中心とする座談会では多く使われている。議論の性格の違い、その中でも特に「客観的妥当性」がどれだけ重視されているかという価値意識の違いが、丁寧化の前置きの使用、不使用に関係する重要な要因であると思われるが、これについてはより多くの討論会資料の検討が必要であろう。

<注>

- 1) ここでは、「主張」というのは、「反対」「賛成」などとは異なり、特定の先行意見に対する内容的な面での関係を持たずに、自分の意見を述べるときの発話機能を意味する。
- 2) 北尾謙治、北尾・S・キャスリーン 1988「ポライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段」(『日本語学』 7-3) p. 52
- 3) 田中登一 1991「児童の話し合いの言葉」(『日本語学』 10-4) p. 40

＜参考文献＞

1. 大杉邦三 1982『英語の敬意表現』（大修館書店）
2. 才田いずみ, 小松紀子, 小出慶一 1983「表現としての注釈—その機能と位置付け」（『日本語教育』52）
3. 杉戸清樹 1983「待遇としての言語行動—注釈という視点」（『日本語学』2-7）
4. 畠弘巳 1987「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」（『日本語学』7-3）
5. 水谷信子 1980「話しことばの文法の総合的考察—ディスコース分析試論」（『米加十一大学連合紀要』3）
6. Brown, P. Levinson, S. C. 1978, 1987 Politeness : Some universals in language usage N. Y.: Cambridge University Press

＜資料一覧＞

1. 政治座談会「緊張緩和と日本の安全保障」NHKTV（1988. 8. 13）
2. 政治座談会「オリンピック後の朝鮮半島」同（1988. 10. 9）
3. 政党討論会「いま何が野党に問われているか」同（1989. 8. 20）
4. 政治座談会「90年代・世界の政治はどう変わるか」同（1989. 12. 24）
5. 政治座談会「中東緊急報告・外相歴訪と今後」同（1990. 8. 26）
6. 経済座談会「中東危機・どうなる世界景気」同（1990. 9. 2）
7. 政治討論会「中東危機・どうする日本の貢献策」同（1990. 9. 9）
8. 政治座談会「中東危機・和平への道を探る」同（1990. 9. 23）
9. 経済座談会「景気論争・日はまだ高いか？」同（1990. 10. 7）
10. 国会討論会「どうする国連平和協力法案」同（1990. 10. 28）
11. 経済座談会「苦悩を乗り越えられるか・ソ連経済とゴルバチョフ」同（1990. 11. 4）
12. 朝まで生テレビ「激論！消費税」テレビ朝日（1989. 9. 30）
13. 朝まで生テレビ「激論！外国人労働者」同（1989. 10. 28）